2014 年 3 月 28 日

「LT会」会報第 14-04 号(総 138 号)

上海 LT コンサルティンググループ

変わりゆく中国の職業教育

毎年 3 月から 4 月は中国の大学生にとって就職活動に忙しい時期だ。最新の統計によると、今年の大学卒業見込み生の人数は 700 万人近くで、政府は就職問題解決のため、様々な方法を考えている。だが一方、多くの地方で企業はここ数年「求人難」を切実に感じており、まったく矛盾した不可解な現象が起きている。

原因はいくつかあるが、その内の大きな一つが、十数年に及ぶ大学教育の行き過ぎた膨張と職業教育(技術者育成教育)に対する軽視だろう。

中国では親達はよく「一回の試験で人生の全てが決まる」という言い方をする。要するに一回きりの試験(大学統一入試)の成績によって入る大学が決められ、それが人生全てに影響するというのだ。こういう考え方は、大学統一入試制度がある台湾、香港、日本等でも存在するが、もちろん中国が最も深刻だ。また、中国には昔から「学びて優れたるは即ち仕える」、つまり成績の優秀な者は役人になる(企業の管理職になるという意味もある)という考え方もある。それで中国では外国人がびっくりするほど公務員を志望する人が多い。そして、本来もっと多くの人が従事するべき基礎的、技術的職業教育に対して、中国の親、学校、社会がこぞってこれを一段低くみているのだ。

だが、周知のように、また事実が証明しているように、職業教育は一つの国の発展にとって非常に重要なものである。中国の GDP がすでに世界第二の水準になって、一部の中国人は鼻高々だが、欧米、日本、台湾等と比べて、中国ではエンジニアの地位は低く、技術レベルも高くはなく、プロ意識も甚だ低いままだ。

中国政府もようやくこの問題に気づき始めた。先週、中国教育部の鲁昕副部長が中国の教育の未来について、重大な意見を発表した。中国の大学統一入試を改革し、一般大学入試と職業大学入試とに分け、将来的には一般大学(中国政府の定義による「211」や「985」等重点大学を除く)の 700 箇所以上を職業教育を主とする大学にするというものだ。

つまり、2000 年頃から中国の若者から人気を失った多くの中専(中等専門学校)や高職(職業高校)等の技術系学校(図1をご参照)を中国の教育の表舞台に返り咲かせようというもので、改革措置というよりはある意味修正ともいえるだろう。

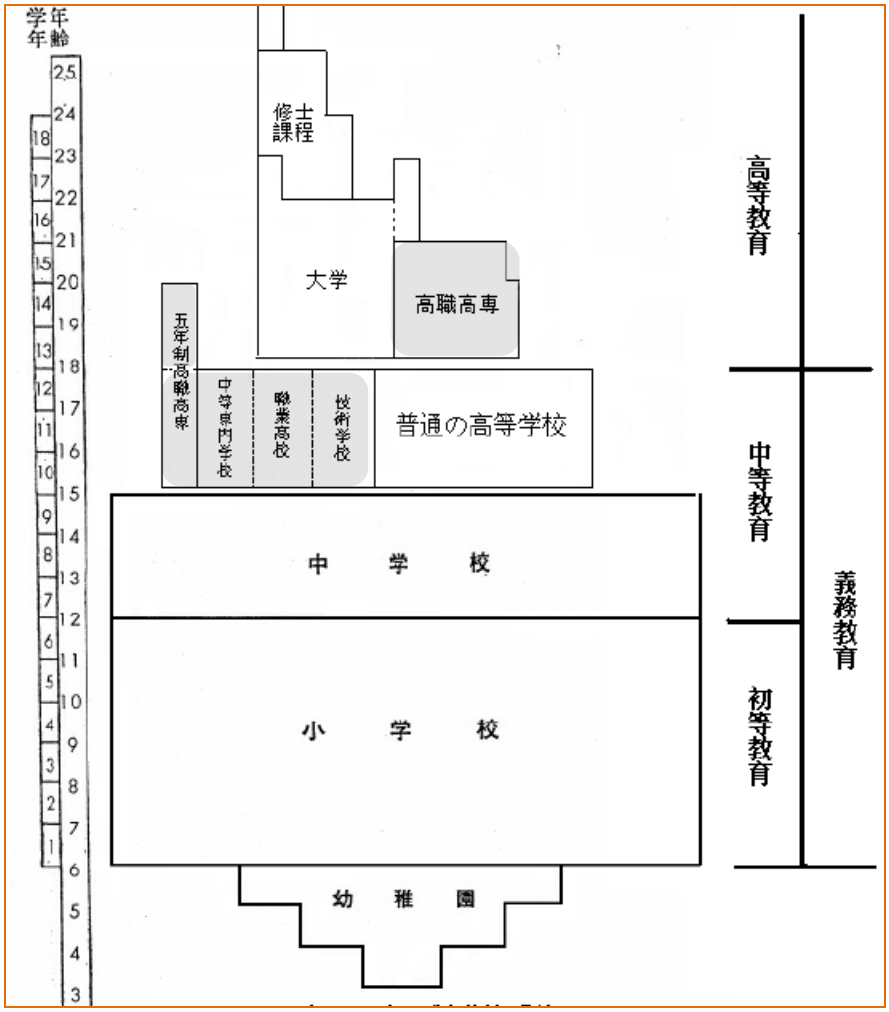
ここ十数年来、中国の職業教育はずっとどうでもいい状態に置かれていた。政府の職業資格認証から企業の採用、さらには社会のブルーカラーに対する意識まで、職業教育の評価はいずれも理想的とはいえなかった。統計データの上では一般大学の就職率は77%で、職業学校の就職率は95%となっているが、これは両者が得る収入の割合に比例しているわけではない。また、大多数の職業学校を選んだ若者は、往々にして一般大学への道から弾き出され、仕方なく職業学校を選んだケースが多い。

鲁昕副部長は、職業教育改革は「中国における教育の戦略的調整」をリードする政策的信号となるべきで、多くの面において職業教育の現状を変えていかなければならないとする。これからは、一部の学校は学

校名を変え、かつて合併された学校はまた分離されるかもしれない。新しい技術技能教育の特色を備えた「工場」が学校の中に出現し、企業と学校の距離を縮め、卒業生も増え･･･

しかし、職業教育改革は都市化計画のように、数年で一定の目標が実現できるものではない。教育改革には、授業の責任を負えるような技術者を育成する時間や、合理的な授業方法を生み出すための時間が必要だ。教育に「大躍進」はふさわしくない。

図1. 中国の全日制学校系統図



以上